

田嶋田園

は し が き

幕末日本は内憂外患、封建制度の根底をゆする資本主義の発達、アメリカ、イギリス、フランス、ロシアなどの外国勢力の圧迫、尊王攘夷論の抬頭、まことにあわただしかつたその中に、漢文を通じて世界の情勢をいち早く知って人民のよい指導者として常に学問に情熱を傾けていた人々勤王であれ佐幕であれ、先覚者たるに変わりはなかつた。

所謂勤王の志士や思想家たちは、そういう意味で案外西洋立憲思想をよく知っており、今、彼等を古くさく感ずる人もあるが、反つて、これらの人々が時代の尖端を切つて進んでいたことも多いのである。岡田鴨里もその一人である。

淡路島というと、田舎の小さな島であるが今でも考えている人も多い。昨年私が東京のある高校の校長と話していた時は淡路島でも百姓一揆があつたのかと不思議そうに語つていた。県立洲本高校の野球部が高校選抜野球で全国優勝したとき、島の内で野球する場所があつたかと疑つた人もあつた。ところがこの島から随分多くの先賢偉人が出ている。高田嘉兵衛・賀集珉平・鈴木重胤

の兵庫県の人頭彰が既に終つてゐる。その次に兆殿司をあげたいが淡路に資料がない。服部嵐雪もその出生が島かどうか問題になつてゐる。

それでは岡田鴨里の登場の順となる。

鴨里は頼山陽に師事して、山陽没後は日本外史の欠を補い之を完成した。これが「日本外史補」十四巻である。それだけでも大きな功績である。その他多く著者を刊行してゐる。未刊のものも相当ある。山陽というとすぐ鴨里の名が浮んでくる。その書いた字まで、そつくりのものが多い。山陽一辺倒の学者鴨里は淡路のみならず一般的に考えても歴史上の人物として重要である。たゞあまり真面目なため、研究しても面白くない固い話ばかりで、学問勉強のことが彼の人生の全部といつてよい。けれどもそういうハツタリのない生活、平凡なようでも誠を以て生涯を貫いた人、淡路出身の有名な永田青嵐先生の所謂「平凡にして偉大」な人物、岡田鴨里こそ最初に顕彰されるべきものである。

今日、彼の生誕地津名町・養家の三原町・主な仕事をしていた洲本市・この三者の教育委員会の協力を得て顕彰会が洲本市第二小学校（洲本学問所から始まる）で催されることになつたのは、兵庫県としても大きな意義がある。

岡田鴨里

一家庭環境

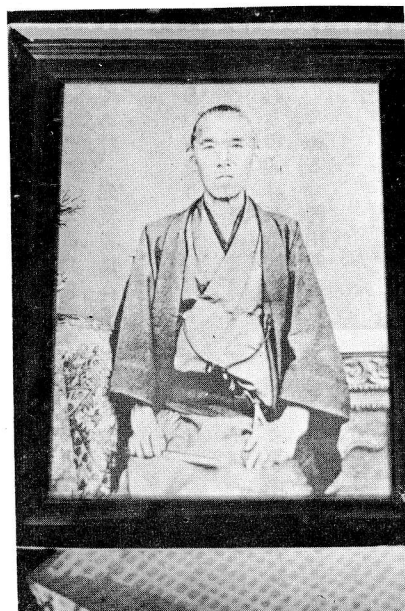
岡田鴨里というと、鴨里という文字から彼は掃守の人だつたということが連想される。この掃守という地名は、つい先頃まであつた淡路交通の電車の駅名に「掃守」というのがあつてこの読み方は人々を悩ましたものである。

掃守は昔大宝令で制定された役所に掃部司（カニモリノツカサ）から起つている。その役目は宮中の舗設畳簾などのことをつかさどつたり儀式のときは宮殿を掃除したり或は式場などの設備をつかさどるのである。「和名抄」には「かむりつかさ」とよみ、「かむもり」は「かにもり」の転で、「古語拾遺」には「蟹守」とある。

「枕草子」には「かにもりつかさの、たたみどもしきて」とあるように「かにもりのつかさ」とある。掃守はそういうわけでカモリと発音するようになった。同様に井伊掃守頭もその読み方が、理解されるわけである。

岡田鴨里という呼び名は岡田周輔家の「成立書并系図共」（徳島大学附属図書館蔵）によると明治三年三月四日惣髪して、以後鴨里と改名したと書かれている。

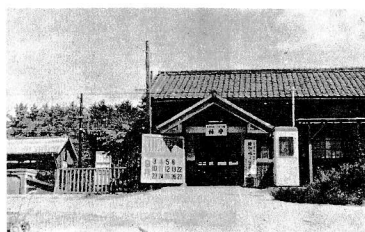
この鴨里は掃守で生れたのではなく掃守へ養子に来た人



岡田鴨里の肖像



明治3年3月4日以後鴨里と改名

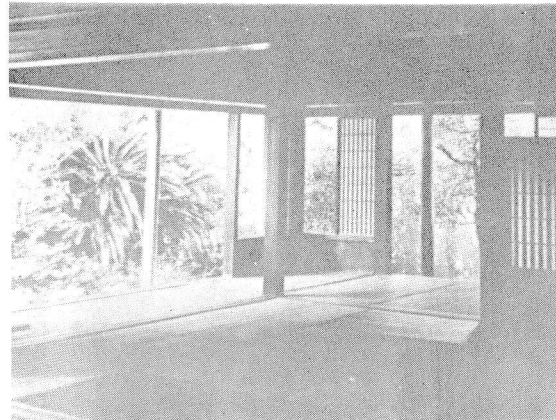


淡路交通の掃守駅

である。彼は文化三年（一八〇六）八月五日淡路島の津名郡津名町王寺（昔の王寺村）の庄屋砂川佐一郎の四男として生まれた。王寺村は後に中田村と合併して中田村となつたので彼を中田村の生れであるとしてある本もあるが誤りでない。砂川家は昔、郡家の城主田村左馬頭春良の弟左衛門行信が砂川氏を名乗つて以来の名家である。その砂川氏の邸宅もその一部分が今尚残つていて昔のおもかげをとどめている。そして「岡田鴨里先生誕生之宅址」の碑が立つている。これは昭和四十年に造られたもので



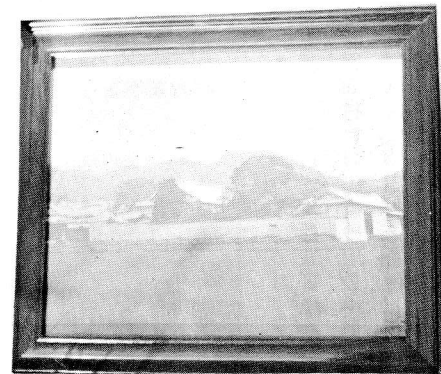
岡田鴨里出生地址の碑



元の砂川氏邸の一部



元の砂川氏邸の一部



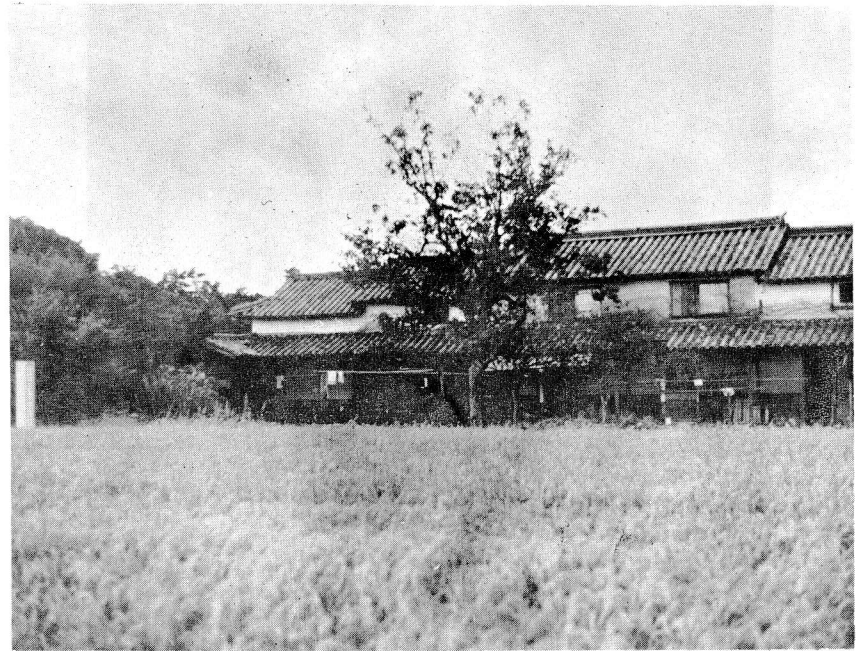
元の砂川氏邸の全貌

彼の諱は僑（又喬とも書く）字は周輔（又周助とも書く）である。それから三原郡三原町の掃守の岡田家の養子となったが、その年ははつきりしない。岡田家は掃守に移つて来る以前は三原町八木の番匠（大工）であつたということである。

この養家の岡田邸は鴨里が洲本文学教授となつてからその養子与一郎が住んでいて、自分は本家から二町ばかり南方にある家へ移り住んで隠居していた。この家も昭和五、六年頃まであつたが今は空地になつている。そしてこゝに岡田鴨里邸宅址の顕彰碑が立つている。この碑は昭和三十三年に造られたものである。

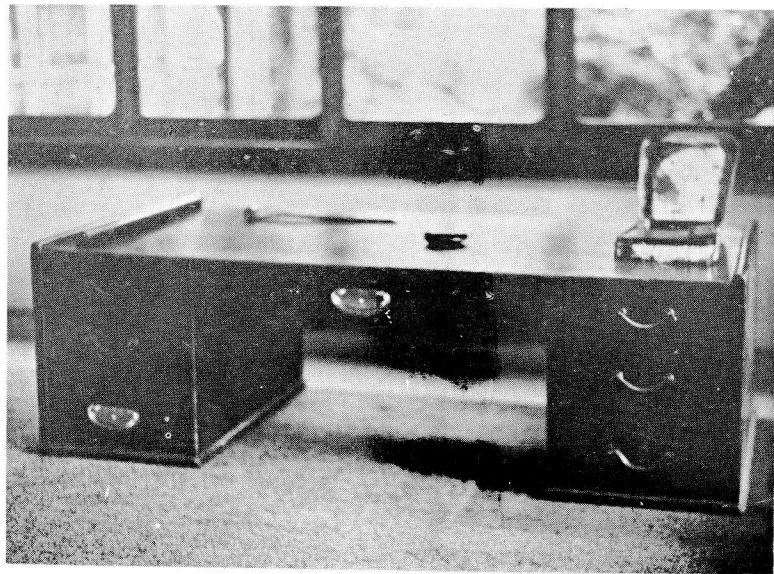
この家にあつた鴨里の机が今残つていて、掃守の中田実氏が愛用している。掃守出身で漢文の非常に実力のあつた故小泉芳吉先生（元県立洲本中学校教諭）が少年時代この家をしばしば訪ねて、鴨里の書齋を見、鴨里の学問している姿を眼に浮べていた。窓前には人工の築山など何もない質素な住いで、芭蕉を植えてあつて、緑の広い葉が土塀に蔽いかぶさり、そして野原を隔てて南辺寺山が見えている風景であつた。

この少年時代に鴨里の部屋を訪れた小泉先生が、後に漢詩集「水西草舎詩集」を出されたのも偶然ではない。



津名町中田に残っている砂川氏邸

（左端が記念碑）



鴨里の愛用の机

それから鴨里の妻は三原郡伊賀利村の庄屋仲野孫右衛門正雄の女である。後妻は三原郡三原町地頭方村の庄屋榎本佐兵衛の姉である。

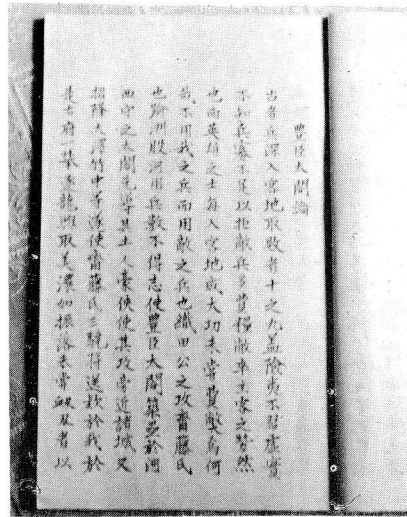
鴨里の子供には三人の女があつて、長女すまには三原郡西淡町慶野村の庄屋武田伊兵衛愛信の三男与左衛門(与一郎のこと)を養子に迎えている。次女かつは西淡町津井村の庄屋古東領左衛門忠需に嫁している。三女やすは鴨里の実家砂川佐一郎恒雄の嫁となつており、実家へ自分の娘を嫁がせているわけである。

養子与一郎とすまとの間に真太郎・長次郎・和三郎・武四郎・又五郎の五人の男子があつた。真太郎は幼名で後に真と改めた。この真は鴨里の孫であるが二代目を嗣いでいる学者である。

当時の岡田家はこのようになかなか素封家であつた。火災にあつて、八木村掃守へ移つてから農業の傍ら商業を営んでいた。大阪方面との商取引も盛んによつた。掃守村の棟附帳の肩書には岡田家は牧卵之助頭入百姓であり、掃守村の御銀主であつた。

三 学

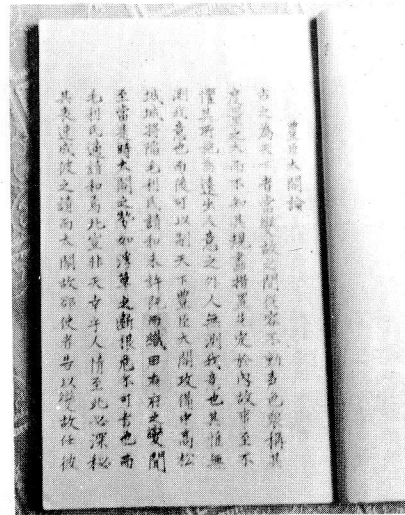
鴨里は生れつき頭もよく学を好んで一生懸命勉強した。



豊臣太閤論(後)

二十歳を過ぎてから京都へ上つて頼山陽に入門その高弟として活躍した。頼山陽が鴨里の豊太閤論を批評して激賞した話が有名である。「蜻洲に在つて此等の文字を作る者、吾が党を始と為す。而して公は特にその錚々たる者なり……」といつている。

この鴨里の豊臣太閤論に二つの別の文章があつて鴨里文稿の一の初の方に二つとも載つている。この山陽の批評は後の方の太閤論に対してなされたのである。



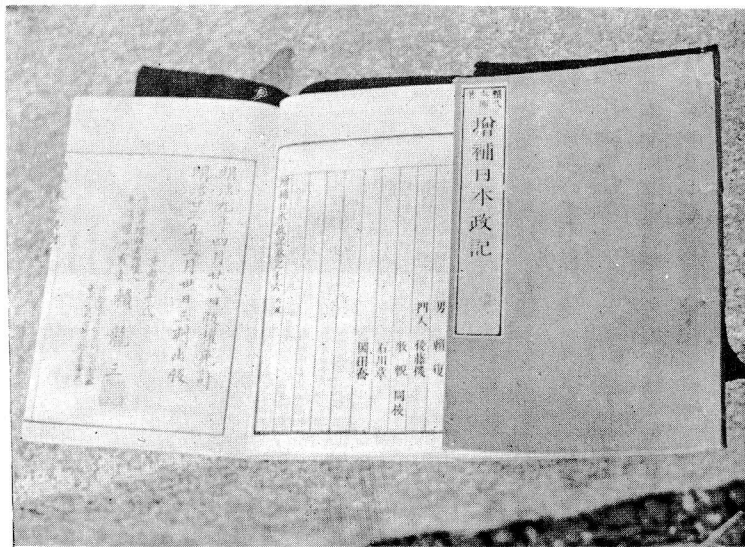
豊臣太閤論(前)

山陽は鴨里に頼んでから、一年後にはなくなつた。

三 著 者

鴨里が頼山陽の門人として常に山陽のよいアシスタントとして山陽の著述を手伝っている。山陽の「日本外史」や「日本政記」の著述には鴨里の影の力が相当あつたようである。「増補日本政記」の末尾には岡田喬の名が見えていられるのはつきりする。

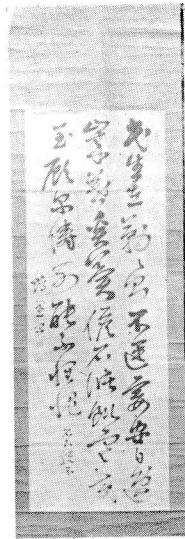
天保二年(一八三一)山陽は鴨里の文章が気に入つて日本外史の不備な点を補つてもらいたいと依頼している。そして日本外史刊行後の収集した資料を鴨里に譲つた。



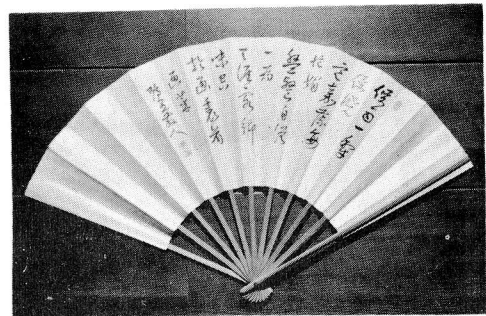
増補日本政記(新見貫次 蔵)

鴨里は山陽に師事してその人格識見に感化されるところ多く、その書く字まで山陽そっくりのものが多く。中には鴨里書とあるのを消せば山陽の書で通るものもある位である。扇面に書いたものでも仲々達筆のものがある。洲本出身の京大名誉教授故藤井正男文学博士も鴨里の筆蹟をほめたゝえている。

頼山陽に似た鴨里の書（巽伝平氏 蔵）



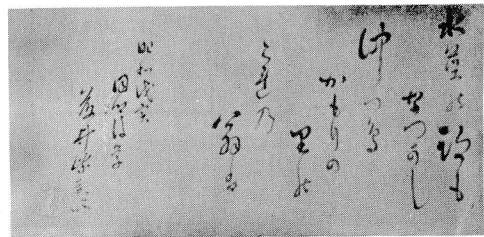
天保三年（一八三二）山陽の歿後鴨里は大坂へ移つて東奔西走広く名士を訪問して、旧記、古文書を収集、上毛安中の藩主板倉甘雨侯が江戸幕府の奏者となつて、歴史に精通している学者を集めよく研究していることを聞いて、江戸に行つてそれからの資料を見せてもらい従来の研究を再検討して「日本外史補」の著述にとりかゝつた。山陽に依頼されてから「日本外史補」十四巻を完成



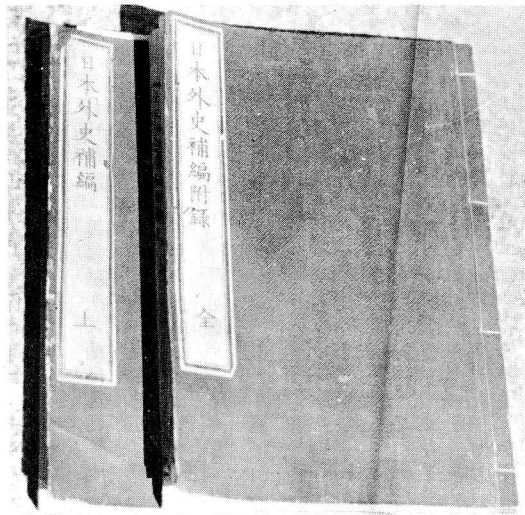
扇面（真野英樹氏蔵）

したが、十九年目の嘉永三年（一八五〇）ということになつていたのであるが、ところが今まで余り知られていなかった「日本外史補編」と「日本外史補編附録」について述べねばならない。

この二つの本は後の「日本外史補」と「名節録」のものになつたものであるが、天保五年（一八三四）に出版されている。山陽死後僅か二年である。しかも木の活字本で排字本と書いてある。「刷印五十部頒同好」とあるから僅か五十部だけしか配布されていないものである。



藤井乙男博士の和歌（菊川兼男氏蔵）

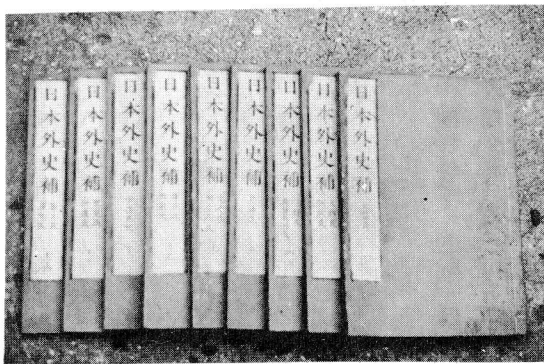


日本外史補編と日本外史補編付録（安富晋氏蔵）

十九年の歳月を経て苦心の結果著わされたという「日本外史補」および「名節録」との差違を研究せねばならぬ。「日本外史補編」の自序にもある通り、「日本外史が著わすところ源平氏のと時から当代まで凡そ六百余年の間、治乱興廢の勢、忠邪得失の蹟と、瞭然と之を掌上に視る如し、特に恨む天亀天正の間、豪雄の四国・鎮西及奥羽諸方隅に割拠する者其の事蹟未だ完備せざるや」そ

れでこの「日本外史補編」を著わす必要があつた。この序文は後の「日本外史補」と全然同じである。そしてこれらの大名の名の目次をみると次のようになってい

- 卷ノ一大内氏 卷ノ二今川氏 卷ノ三三好氏
 - 卷ノ四長曾我部氏 卷ノ五島津氏 卷ノ六大友氏
 - 卷ノ七立花氏 卷ノ八浅井氏 卷ノ九浮田氏
 - 卷ノ十伊達氏 卷ノ十一最上氏 卷ノ十二蒲生氏
- についての伝記をこの「日本外史補編」に書いている。



日本外史補全部（新見貫次 蔵）

後の「日本外史補」には北畠・朝倉・里見の三氏が増加している。研究の結果訂正増補が必要だったことがわかる。しかし天保五年（一八三四）に早くもその大部分が出来上つていたことがはつきりしたのである。

次に天保五年（一八三四）十月刊行の「日本外史補編附録」の目次をあげる。

卷ノ上 荒木安芸 六呂木某 山副某 波多野三郎

玉井新三郎 三井角右衛門 山崎託美

印牧弥六左衛門 尼子勝久 手塚為広

毛利勝永 後藤基次 植島重利 南冬中書

石川重之 成瀬正成 鳥井忠広 武田信繁

多田新藏 佐野天徳寺 中山家範 狩野一奄

宇佐美定行 竹股朝綱 小島一忠 岡野左内

杉原親憲 木村重茲 奥村永福 山田勘十郎

卷ノ下 佐久間十蔵 松平市左衛門 篠岡平右衛門

三宅喜蔵 川村権七 佃十成 栗田利安

村田吉次 恒屋善七 福島丹波 大崎長行

林新右衛門 後藤木兵衛 熊沢平右衛門

奄原助右衛門 孕石備前 広瀬左馬助

広田図書 蒲生郷舎 島勝猛 小幡信世

渡辺勘兵衛 米村権右衛門 吉田助左衛門

吉田助左衛門 市川茂右衛門 蒲生郷舎 島清興

小幡信世 米村権右衛門

以上七十名で、「日本外史補編附録」に載っている人との名節録のものは、その数に於て十四名の差があり、前者のついでに後者にはない人もある。けれども前者は後者の基本となつてゐることは疑いなく、皆足利時代の末までの人々である。

これらの人々は皆初は一兵卒だつたような人が多く、それ程著者名でない平凡な人である。けれども忠義、奇節（すぐれた操）の士であつて、盛衰存亡のはげしい戦国の世にあつても節操を変へることのない、処世術をうまく使つて敵味方の区別なく有利の方に仕えるというようなことのない人々である。たとえば有名な人としては後藤又衛基次のこと載つてゐる。又兵衛は黒田孝高に仕えていた。黒田と細川両氏が不和になつて、黒田氏の勢力が弱く細川氏の方が強くても、黒田氏のもとを去つて細川氏につくようなこともなかつた。又大阪の役でも大阪方西軍が弱く徳川の東軍が強いのがわかつてゐても東軍になびかなかつた。その子隠岐も豊臣氏の恩顧を受け戦になつても父と共に戦死をしていて基次の子として恥しくない最後をとげた。

池田市郎兵衛 黒田彦左衛門

以上五十六名である。名節録はこれを根拠として嘉永三年（一八五〇）出版されているが、次にその人名をかゝげると

卷ノ一 山中幸盛 荒木大蔵丞 佐々清蔵 山口小辨

毛利勝永 氏家行広 植島重利 増田宗重

真野佐太郎 後藤基次 石川重之 成瀬正成

鳥居忠広 中山家範 狩野一奄 間宮好高

佐野了伯 武田信繁 仁科信盛 馬場信房

高坂昌宜

卷ノ二 宇佐美定行 杉原親憲 小島一忠 竹股朝綱

岡左内 佐久間十蔵 松平市左衛門 林新右衛門

篠岡平右衛門 金上盛備 黒沢甚兵衛 車善七

奥村永福 横山長知 飯田覚兵衛 三宅喜蔵

福島丹波 大崎長行 熊沢平右衛門 可児吉長

小田孫兵衛 上田重安 川村権七 佃十成

卷ノ三 栗山利安 村田吉次 恒屋善七郎 小河伝右衛門

芳賀内蔵允 井戸龜右衛門 数内匠 矢野正倫

真鍋貞成 松野主馬 田中内蔵丞 友田吉直

渡辺了 朶石備前 広瀬左馬助 奄原助右衛門

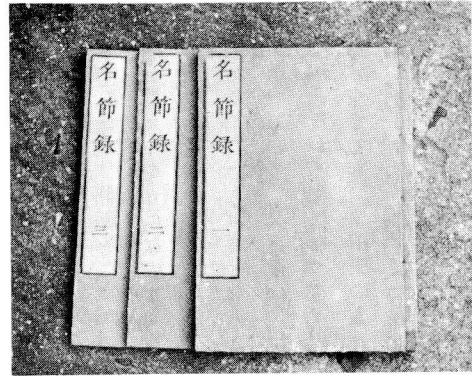
黒田彦左衛門 広田図書 池田市郎兵衛

もう一つ例をあげると成瀬正成という人は徳川氏の家臣であつたが、豊臣秀吉が大坂城にあつて徳川氏の将士に命令して騎馬練習をさせた。そして千貫櫓に登つて之を見物していたら美しい馬にのつてゐる者があつた。秀吉があれは誰だと問うと成瀬正成という人であると答へた。そして正成の封禄をきくと二千石だということであつた。秀吉は立派な士だ。若し我に仕えるなら五万石をやるうということであつた。家康は之をきいて正成に、お前はよく豊臣氏に仕えたら富貴たちどころに到る。我も亦うれしいことであるといつた。そうすると正成は涙を流して「何と仰せられます。私不肖といえども禄を貧り主君を忘れようか」といつた。家康は感心して群臣に語つた。このような人々の伝記をかゝけてゐるのである。

この名節録を出した目的は、幕末の社会変革期にあつて、人心や、もすれば動揺し変節漢横行して、道德の方向を誤らうとするとき、毅然とした態度で義理を弁え節操を変えず正道を維持するため、戦国武士などの具体例をわかり易く解説したものである。その序文に「古人の言に名節は道の藩籬（注かきねの意）である。家に藩籬があると資材を護ることが出来るし国に名節の土があると、綱常（注人のふむべき道）を維持出来る」と昌頭に書いて

であるのはこの意味である。このように名節録は幕末日本
の期待される人間像をえがいて、三巻出版したのであ
る。

それから広く
刊行されている
本に「蜂須賀家
記」というのが
ある。明治九年
十月岡田鴨里編
輯として東京銀
座三丁目の東洋
社から出版され
ている。その頃
鴨里は洲本市紺
屋町に住んでいた。この原稿の脱稿は明治五年十月であ
るが、大々的に活版印刷されたのは四年後の明治九年で
あつた。



名節録三巻（新見貫次 蔵）

この書物は阿波藩の蜂須賀家の代々の大名を中心に蜂
須賀一族の全体にわたつて年表式にその事蹟の大体、制
度の沿革、臣下の功罪、改事に関係する記事などをか
げたものである。この書物が主として参考としたものに

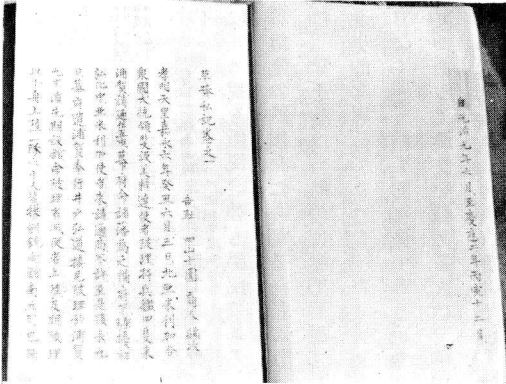
る。これも「名節録」と相まつて期待される人間形成に
必要な道徳論を展開したものである。

それからやはり未刊のものに「草莽私記」がある。

この著書は幕末
日本外交秘史と
もいふべきもの
で、その著者名
岡田鴨里としな
いで吾恥四山十
冊番人として別
名を使っている。

四山というのは
岡という字を分
析したもの十冊
は田という字は
十をかこんでい

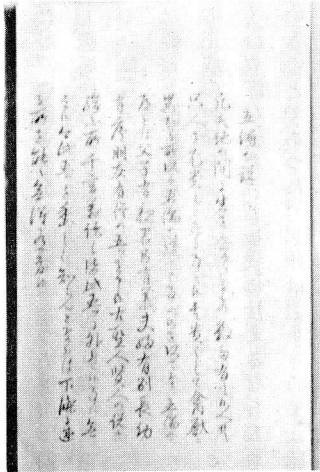
る。喬人は僑である。こんな変名にして秘密の内に之を
著わしている。吉田松陰の吉田を二十一回としたのにあ
やかつたのだろうか。この著書は嘉永六年（一八五三）
六月から慶応二年（一八六六）十二月までの外国との関
係についての歴史を書いてある。初には嘉永六年六月三



草莽私記（湯浅静里氏 蔵）

は合田厚元編集の年譜、公家譜、蜂須賀家譜、年表秘録
であつて、副次的に使つたものは寛永系譜、藩翰譜清水間見録
藩士系譜および諸家記伝私史などである。この家記は昭
和十八年に現代訳された出版、阿波郷土会から発行され
ている。現在でも割合よく利用されている郷土研究に使
利な本である。

次に鴨里の著書で公刊されていないものが相当ある。第
一に「五倫の説」という著書がある。文久三年
（一八六三）六月に著わしている。五倫というのは父子
君臣、夫婦、兄弟、朋友間の道徳論である。人間が禽獣
と異なる所以を詳しく説明している。父子親あり君臣、
義あり夫婦別あり長幼序あり朋友信ありこの親、義別、
序、信
の五つ
の五倫
について
一つ一つ
一つ一つ
摩親切
に解説
してい



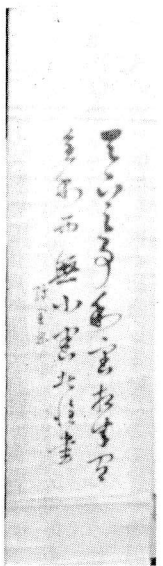
五倫の説（湯浅静里氏 蔵）

日米使ペリリが浦賀に来て物情騒然たる世相をえがいて
いる。最後は孝明天皇の崩御で終つている。惜しいこと
に未だ出版されることがないのは「五倫の説」と同様で
ある。

その他やはり未刊の鴨里文稿が五巻あり。その第三巻
の終りに高田屋嘉兵衛伝があつて可成り詳しい。その第
四巻は山道遊記と西遊雜記とに分れている。第五巻には
「日本外史補」や「名節録」のもとになつたものと、源
頼朝、織田信長などの英雄の伝記論贊がある。

以上既刊、未刊の著書を合せて可成りの冊数になる。
鴨里の著書を全部読むだけでも大変な仕事である。この
ように鴨里は非常な勉強家で一生読書と著述に専念した
といつてもよい。

彼の座右の銘は「天下之事利害相半、有全利而無小害
者惟書」とあつて、天下之事は何でも利と害と半半であ
るが、全利あつて、小害の無いものはただ読書である。



湯浅静里氏 蔵

書物こそ鴨里の最大の修養の対象であり又人生最高の好伴侶であつた。読書が彼の最上の娯楽でもあつた。

四思 想

「日本外史」は頼山陽が「大日本史」を根拠として著わした大義名分を明かにしたものである。それは皇室中心の勤王思想である。この「日本外史」の延長として鴨里の「日本外史補」の思想が勤王思想であることは当然である。

勤王思想は当時の一民萬民の進歩的思想であつた。天皇を尊ぶが、天皇以外は我も臣民、彼も臣民であるとする人間の平等論で、封建の鉄鎖をたち切る一種の民主運動に他ならなかつた。勤王論は当時の反動的思想でなくむしろ人間平等の進歩的な思想であつた。たとえ尊王論そのものが平等論でなくとも結果的に見てそういう影響を与えたことは事実である。漢文を読める人は、中国の書物を通じて西洋の立憲思想を人より早く理解出来、そして自由民権運動の母胎となつたのである。

鴨里も民主思想の理解者であつたことは次のような彼の文章でわかる。洲本市築地町江国寺（家老稻田九郎兵衛家の菩提寺）境内にある稻田植誠の碑文に鴨里の撰文

志志たちも鴨里を非常に尊敬していたのである。彼は「名節録」を著わしたが、本人こそこの名節録中にその第一頁をかざりたいような人物である。

洲本で明治の初に起つた庚午事変（又稻田騒動）は重大な問題であつたがその当時の鴨里の態度がどうであつたかを考えて見よう。

明治三年五月十三日に起つたこの庚午事変は明治維新の変革期に蜂須賀本藩派と稲田派との多年の鬱積した反目が新政府の給与切換えの問題をきっかけとして爆発した事件である。このクーデターもその前日即ち十二日にこの暴動を未然に防ぐ努力がなされている。農兵隊の司令の数名に説諭して明日の計画を中止するよう勧告しても兵隊一同の相談で決定したことから皆ともう一度話し合いをした上でないと承服出来ぬということで、仲々きゝ入れない。そこで権大参事沢式部や岡田鴨里など数名の人々が、文武学校へ行つて各司令に対して直ちに藩庁へ出頭せよと伝えたが今出頭するところだというので藩庁で待つてみると、やつて来て色々説諭したが、本藩派の森長左衛門始め一同はもう決心していますから私達の思いのまゝにして下さいといつて、この暴動を未然に防止出来なかつたのは残念である。この時の鴨里が本藩派の人々に対して、実力

がある。それに長州征伐に関する記事がありその文章の中に「凡所施為無大小必与衆謀之」という文句がある。

鴨里は彼の「草莽私記」を読んでもわかるように、幕末日本の対外関係をよく認識していたので、その国際的な危機意識も強く彼が亦攘夷論者であつた。

阿波藩の大名蜂須賀氏は徳川家と姻籍関係にあつたので、佐幕に傾き易い点もあるので鴨里は、時々建白してその大義名分をあやまることのないように尽力した。明治元年蜂須賀茂韶が幕府の命令で京都を守護したときでも、鴨里は病氣にもかゝらず上京して、順逆の義について建議している。その洲本出発にあつて「今回は恐らく生きて還ることは覚束ない」と決心の覚悟でいたといふ。

五性 格

鴨里は謹厳そのもの人で、所謂くそ真面目の性質で、ユーモアを解した逸話も聞かない。ひたすら学問の研究に精進して一生、勉学に終始した。人物伝としたり、派手な、はなやかな話のない、無味乾燥まことに面白くないことになるわけである。

けれどもそれでこそ淡路に來た藤本鉄石などの勤王の行動に出ないように勧告したことは、学者として常に平和を好んでいた彼の性格を物語るものである。

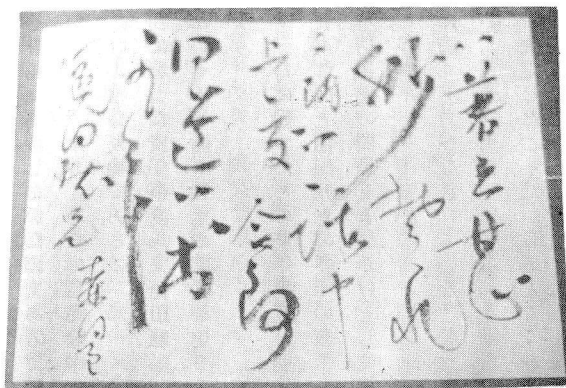
この時、孫の岡田真と大村純安（純道の子）らが作つた概文に稲田派を攻撃した内容のものがあつて、今からでも遅くはない、改心したものはその罪を許してやるから人民はみだりに動揺してはいけないということを書いてある。何だか二・二六事件を一寸想起するような言葉の端々が見られる。

六 鴨里をめぐる人々

彼の交友として有名な人に、塩谷宕陰、牧百峯、後藤松陰、草場佩川、沢村西坡、林鶴梁、広瀬旭莊などをあげねばならない。淡路で交つた人に藤本鉄石、松本奎堂、森田節斎、河野葵園（僧咲雷）伊藤聴秋などがある。

塩谷宕陰は安井息軒と並び称せられた、江戸末期の漢文作家として第一流の人である。彼の弟箕山その子青山、青山の子が東大教授だった温である。阿波藩が儒者を呼ぼうとして、宕陰に礼を厚うして之を招いたとき宕陰は「阿波藩には鴨里のような学者がいるではないか、彼を招聘せよ」といつて宕陰が之を辞退したいという話も残っている。牧百峯は鴨里と山陽の同門の人である。後藤松

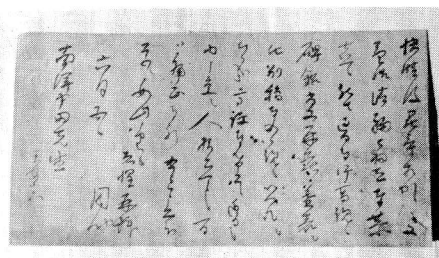
陰は美濃の人でやはり山陽の弟子、篠崎小竹の女婿である。草場佩川は佐賀藩の儒官で肥前の人・絵も上手であった。林鶴梁は武蔵の人で徳川武庫の吏人であった。藤本鉄石は天誅組の首領として有名で名は真金別に鉄寒士などと号していた勤王家である。松本奎堂も鉄石同様淡路へ来ている勤王家。森田節齋は大和五条の人で、鴨里と山陽の同門、名は益字謙蔵五十歳でその弟子無駭女史



森田節齋より鴨里宛手紙（真野英樹氏蔵）

た人に那波綱川、七条文次郎、中田觀吉（南洋）、牛尾藻介、横野鏡山、砂川新助（藍谷）、玉井拙蔵、奥井莊一（寒泉）岡田真などがあつた。いずれも有名な人々である。鴨里はこの学問所これらの先輩から教えられる所多く、又同僚として交つた人々の手紙も相当残つている。この洲本学問所はその後明治元年に文武学校と改称四年九月小学校として開校、五年一月廃止十一月再び始め六年六月日進小学校と改称、大正二年には洲本第二尋常小学校となつた。

鴨里の門下生として次の人々をあげねばならない。久保田信平（高田信平、南里のこと）元名東県権中属となつた西淡町志知の人である。倉本雄三は三原郡西淡町の樫田村の里長後に津名郡兼三原郡長、神崎郡長となつた達筆の人。樫山はその号である。その他西淡町の湊の船越李谷や同じく西淡町津井の古東領左衛門（鴨里の二女が嫁している）三原町榎列の原口泰（南郷村）は京都の第三高等学校の講師となつた人。新しい所では西淡町阿那賀の仲野理一郎、それから林鶴梁も時々文章の訂正を依頼したことがある。最後に土井光華をあげねばならない。光華は鴨里の門人である。森田節齋が淡路に來た慶応二年（一八六六）十一月節齋五十六歳であつた。当時



鴨里より中田南洋宛手紙（新見貫次蔵）

を妻にした。鴨里と肝胆相照す仲であつた。河野蔡園は淡路五色町堺の人で大阪に出て白蓮池館という塾を開いている学者である。伊藤聴秋は洲本の生れで有名な漢詩人である。

鴨里は文久元年（一八一六）に洲本学問所出仕となつて儒者役を仰せつかつた。この洲本学問所というのは、寛政十年（一七九八）に造られたもので藩士から庶民に至るまで入学した藩校で、最初は中田謙齋（敏）藤江石亭（秀）を教官として出発した。その後この教官となつた光華は高野山にあつたが、節齋危しと聞いて、僧衣を借りて來て節齋にきせ、僧侶の姿をして、淡路へ節齋を同伴したものである。これは稲田太夫の招きによるものであつたといわれている。光華はまづ節齋を三原郡緑町俊文の自宅に一泊させてそれから掃守の鴨里宅へ案内した。更に西淡町志知の久保田南里を訪問、最後には南淡町賀集の庄屋白川宅に落ついてこゝで塾を開いたという話がある。

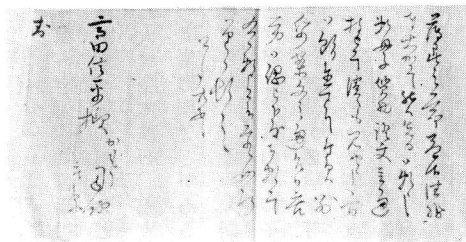
セむすび

以上述べたように鴨里の生涯はひたすら学問特に漢文学の研究に明け暮れたものといえる。多くの著書を世に問うて一生の間研究に精進これ努めたのである。

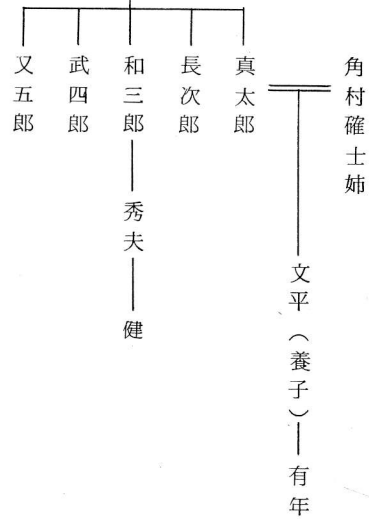
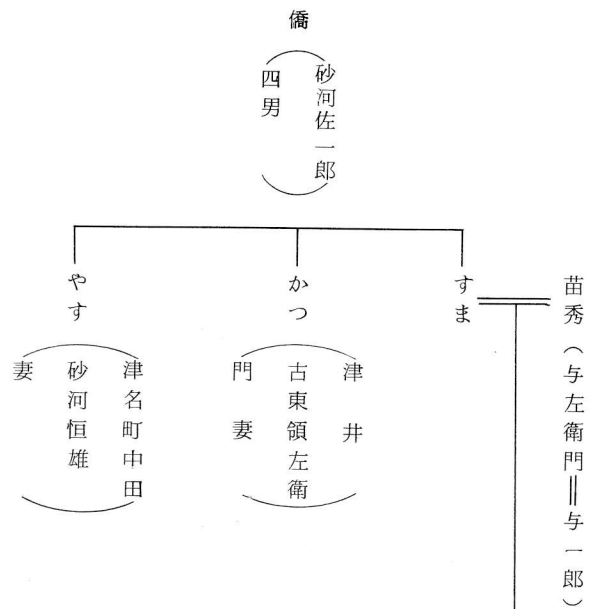
明治十三年夏病のため九月五日に歿した。時に七十五歳であつた。二代目をついだ孫真の方が明治九年になくなつていた。真もやはり洲本文武学校の教授となつた学者である。真の甥、秀夫も広島高等師範学校の漢文の先生であつた。

鴨里はその生前の功勞に対して大正四年十一月正五位を贈られている。

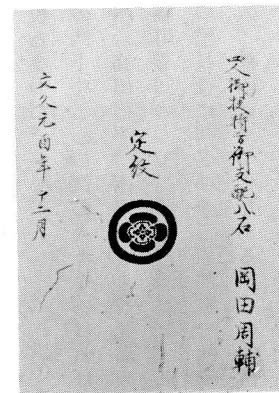
鴨里を祭る御墓は現在三原町掃守岡山の榮福寺境内に



鴨里、庄兵衛から高田信平宛手紙（新見貫次蔵）



岡田家々譜



岡田家の定紋



岡田家の御墓 (三原町掃守栄福寺境内)

あつてその妻、孫真、真の養子、文平 (榎列村幡多の秦家より岡田家に養子に来た人) の四つが並んで建っている。

鴨里年表

文化三年	一八〇六	八月五日	津名郡津名町王子の砂川佐一郎の四男として出生
天保三年	一八三二		師山陽歿、後大阪に行く
天保五年	一八三四		鴨里の著者日本外史補編、上中下巻、日本外史補編附録刊行
嘉永三年	一八五〇		鴨里の著者、日本外史補と名節録完成刊行
文久元年	一八六一	九月二四日	鴨里、中小性格に召出され四人扶持八石給わる。御儒者役を仰付られ、役中、大小性格に仰付られた。これから学問所御用となる。
文久三年	一八六三	五月二八日	若殿様洲本逗留中御素読御用仰付られる
文久三年	一八六三	八月三日	議事役仰付られ地盤御用兼帯となる。
文久三年	一八六三	六月	「五倫の説」著述完成
文久三年	一八六三	九月二五日	議事役御免
慶応二年	一八六六		鴨里の著者「草莽私記」完成
明治元年	一八六六	四月七日	御用につき、京都に召されたが病気味のため嫡孫真同伴京都に上る
明治元年	一八六六	五月二日	鴨里老年となり真が家督相続をした。然し御用の節は御儒者役中、大小性格になり特別の思召で一生五人扶持を下賜された。
明治元年	一八六八	五月三日	徳島から御召寄のため出張七月十日御用の済むまで滞在
明治二年	一八六九	正月四日	右同じ要件で再び徳島に出張
明治二年	一八六九	正月	政体御一新につき、参政にあづかるように仰付られ勤中五人扶持方物頭席同様想得るよう仰付られた。
明治二年	一八六九	九月三日	老年の上病気となったので保養して病間出仕して勤務

明治三年	一八七〇	三月四日	してよいことになった。願によつて惣髪して後鴨里と改名
明治三年	一八七〇	五月二日	庚午事変の前日暴動を未然に防ぐため努力した
明治九年	一八七六	十月	「蜂須賀家記」鴨里編輯の著書東洋社から出版
明治十年	一八七八		鴨里掃守村に帰り、子与一郎と別居
明治十一年	一八八〇	九月五日	鴨里、病の為歿す。時に七十五歳
大正四年	一九一五	十一月	正五位贈位

昭和四十一年十月三十日 印刷
昭和四十一年十一月六日 発行

著者 新見貫次

兵庫県教育委員会
洲本市教育委員会
三原町教育委員会
発行者

津名町教育委員会
神戸新聞社